

ブルーの世界

2025年7月4日(金)－9月23日(火・祝) 会場：常設展示室

※月曜休館 ただし、7月21日(月・祝)、8月11日(月・祝)、9月15日(月・祝)は開館、7月22日(火)、9月16日(火)は休館

※開館時間 9:30－17:00 ただし、8月9日(土)、10日(日)は 19:00 まで

※ギャラリートーク 7月5日(土)、9月7日(日)

※ふくふくおはなし美術館(対話型鑑賞会) 7月26日(土)、8月24日(日) いずれも 14:00 より

はじめに

初めて宇宙へと旅立ったガガーリン(1934-1968)が「地球は青かった」と語ったように、私たちの住むこの星は、まさに青に満ちています。果てしなく広がる大空、きらきらと光り輝く海——そう聞いて、みなさんが思い浮かべるのは、それぞれに異なる「青い情景」でしょう。澄み切ったスカイブルーや、紫みを帯びた群青色、あるいは限りなく深く神秘的な青かもしれません。自然の中に存在する青は、生き生きとした明るさを感じさせる一方で、私たちにリラックス効果や癒しをもたらす色としても親しまれています。

しかし、青は単に視覚的な色を表すだけではありません。人の感情や心の状態をも映し出す言葉として、私たちの暮らしに深く根付いています。人生において情熱や希望に溢れた時期を「青春」と呼んだり、高い目標や理想を抱く状況を「青雲の志」と言ったり。さらに、血の気が失せた顔色を「青ざめる」や「顔面蒼白」と表現したり、どこか物憂げな気持ちを「ブルーな気分」と形容したり。このように、青は明るさと静けさ、あるいは希望と憂鬱といった相反するイメージを内包する不思議な色なのです。

本展では、この多面的な青に焦点を当て、さまざまな美術作品を通してその魅力を紐解いていきます。作品に描かれた青い風景、素材や技法から生まれる青、そして人の心象を表現する青。バリエーション豊かな「青の世界」に飛び込み、その奥深さを感じていただければ幸いです。青をめぐる旅が、みなさん一人ひとりの心に響く「私だけの青」との出会いを結びきっかけとなりますように。

自然界——空の青、海の青

はじめに、身のまわりに広がる自然に宿る青の美しさに焦点を当ててみましょう。森谷南人子(1889-1981)の《内海初夏(高島)》(No.3)は、まるで瀬戸内海を山の上から見渡しているかのような、雄大な感覚を味わえる作品です。透き通るような青い海には島々が浮かび、その上には淡い色をした青空が広がっています。海を行き交ういくつかの船や、海岸に停泊する船の様子からは、人々の穏やかな暮らしが感じられます。さらに遠くを眺めれば、島々がぼんやりと影を見せ、その向こうに広がる無限の世界を予感させます。

ところで、海や空が私たちの目に青く映るのは、光の散乱によるものです。太陽光が地球の大気を通過する際、波長の短い青い光は、波長の長い赤い光よりもエネルギー量が大きく強く散乱されるため、空は青く見えます。同じ原理で海もまた、太陽光が水中に吸収される際に青い光が反射されやすいために青く見えるのです。

光の当たり方で表情を変える空や海の青は、作者にとって限らない表現を可能にする色です。雲ひとつない快晴の空や、朧月の浮かぶ夜空など、私たちが見上げる空の見え方は一日たりとも全く同じであることはないでしょう。見る人に安らぎや広がりを与える一方で、深い静けさや遠い記憶を呼び起こすこともあります。美術作品において、青は単なる色彩を超え、自然の美しさや人間の感情を深く伝えるための重要な役割を担っているのです。

山の青、果実の青

もちろん、自然界で青いのは、空や海だけではありません。「分け入っても分け入っても青い山」と詠み、奥深く続く山の情景を表現したのは種田山頭火(1882-1940)ですが、小林和作(1888-1974)の《石槌山中の春》(No.4)は、春の麗らかな陽光を浴び、芽吹き始めた山の木々が織りなす柔らかな青色の情景を描いています。一方《秋山》(No.5)では、山肌を彩る紅葉が重なり合い、全体として赤みを帯びた印象です。しかし秋特有の澄み切った青空には、やがて訪れる冬の気配が感じられます。

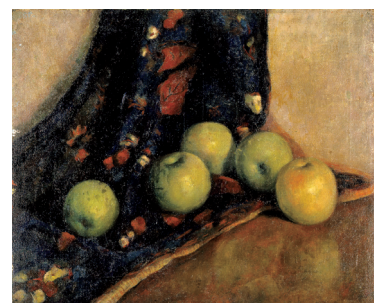
また、渡邊貞之(1909-1994)の《山麓の果樹畑》(No.9)は、土色の畑とのコントラストによって、山肌や木々の青さがより一層際立つ作品です。果樹畑と言えば、まだ熟していない果実の緑色を青いと言うことがあります。小林徳三郎(1884-1949)の《お盆の柿》(No.7)や吉田卓(1897-1929)の《りんご》(No.8)には、それぞれ青い柿やりんごが描かれています。もしかすると《りんご》は単に青りんごを描いたのかもしれませんが、右端のりんごが赤く色づき始めている様子から、思わずその背景にある物語を想像せずにはいられません。



No.3 森谷南人子 《内海初夏(高島)》1944年



No.4 小林和作 《石槌山中の春》



No.8 吉田卓 《りんご》



No.14 野田弘志 《ラピスラズリ》1989年



No.17 《姫谷焼染付鳳凰文皿》17世紀後半



No.15 河井寛次郎 《海鼠瓜壺》



No.29 前川博人 《青い顔の女》1950年

素材と技法が織りなす青の表情

鉱物が生む神秘の青

野田弘志の(1936-)《ラピスラズリ》(No.14)に描かれた青色のラピスラズリは、古代オリエントや中世ヨーロッパで装飾品や顔料として珍重された鉱石です。その鮮やかな青は、権力や高貴さの象徴とされ、ルネサンス期の絵画では、作品に深みと奥行きを与える重要な顔料として用いられました。本作では、化石や他の鉱石とともに描かれることで、ラピスラズリの持つ悠久の歴史が感じられます。内なる輝きを思わせるような、深い青みが印象的です。

陶磁器に息づく伝統の青

東洋においても、青は文化に深く根付いた重要な色です。白い素地に酸化コバルトの顔料で絵付けし、ガラス質の透明釉をかけて高温で焼き上げる「染付」は、その清廉な美しさが特徴です。

例えば、伸びやかな筆致が目を引く《姫谷焼染付鳳凰文皿》(No.17)。江戸時代後期に福山で開窯された姫谷焼は、素朴ながらも力強い意匠が魅力です。また、江戸時代後期から幕末にかけて活躍した永楽保全(1795-1854)は、中国陶磁、特に古染付の研究に熱心に取り組みました。彼の作品に見られる網絵の繊細さや、古染付が持つ素朴な味わいは、保全の卓越した技術と深い造詣を伝えています。さらに、近代の建築家でありながら趣味として陶芸を嗜んだ藤井厚二(1888-1938)は、伝統的な染付の技法を踏まえながらも、幾何学的な造形やモダンな感覚を取り入れました。《染付七角鉢》(No.19)に見られる七角形という珍しい形状に、染付の藍色が鮮やかに映え、近代的な美しさを放っています。

一方、青磁の滑らかな肌合いと釉薬が生み出す淡く美しい青は、侘び寂びの精神にも通じる静けさをたたえています。《七官青磁管耳花入》(No.16)と黒川清雪(1931-2019)《青磁香炉》(No.21)は、ともに青磁でありながら、青の色味はそれぞれ異なります。前者が透き通るように白みを帯びた青、後者が柔らかい黒みを帯びた青と表現できるかもしれません。また、陶器を焼成する際に生まれる釉薬のひび割れ「貫入」もまた、作品の個性を物語る重要な要素です。貫入を含めた色調や濃淡、線の太さや長さ、密度の違いなど、作品を見比べながら観察することで、それぞれの独特の表情がより一層際立ってくることでしょう。

さらに、陶磁器の表面を覆うガラス質の釉薬にはどのような表現があるのでしょうか。河井寛次郎(1890-1966)の《海鼠瓜壺》(No.15)は、海鼠釉と呼ばれる青色の乳濁釉が施された壺。その名の通り、海鼠に似た風合いが特徴です。作品の表面をじっくり観察すると、星屑のような微細な気泡が無数に息づいていることに気づかされます。光を浴びると、その一つひとつが微かに煌めき、まるで夜空を閉じ込めたかのような神秘的な表情が浮かび上がります。

漆芸においては、漆地に青貝と呼ばれる夜光貝や鸚鵡貝、鮑貝などを貼りつけ、その上から漆を塗り重ねて磨き出す技法があります。光の当たり具合や見る角度によって、青貝が放つ多彩な青の表情が見る人を魅了します。《唐物青貝瓢形食入》(No.22)や、青貝螺鈿が施された筆が体現するように、青貝は実用品の装飾としても親しまれ、日々の暮らしに豊かな彩りを添えてきました。

心象風景としての青

ここまで、私たちは視覚的な青を帯びた数々の作品を巡ってきました。しかし、青の表現はそれだけにとどまりません。この章では、人の心の内側と深く結びつく青の世界へと足を踏み入れてみましょう。

例えば、恐怖や病によって血の気が引いた顔を「顔面蒼白」や「青白い顔」と表現するように、青は単に色彩を描写するだけでなく、同時に人の心情や感情を映し出す色でもあるのです。

前川博人(1923-1975)《青い顔の女》(No.29)は、頭の後ろで両腕を組み、椅子にゆったりと腰掛ける女性を描いた作品です。作者自身が「できる限り広がりを目指しバックに木かカベか判らぬものや、また木の葉にしても木についているのか虚空にぶら下がっているのか捕えどころのないものを入れて、その中に青い女の顔を浮かした」(註1)と語るように、背景は曖昧模糊としています。そんな中に浮かび上がる女性の顔は、タイトル通りに青く染まり、やや低い位置を見つめるその眼差しには、寂しさや虚しさがにじみ出るようです。青白さに際立つ頬や唇、耳のピンク色が、かえって彼女の複雑な感情を一層際立たせています。

他にも、増田常德(1948-)《肘をつく少女》(No.30)や松田敏男(1949-)《モデル》(No.31)なども人物を主役としながらも、その周囲を包み込む青が目を引きまします。作者がどのような思いを青色に託したのか、言葉に残されているものは多くありませんが、その心情に思いを馳せることで作品は新たな表情を見せてくれるはずです。

物語が息づく青

この章では、まるで絵本の1ページをめくるように、物語の世界に引き込まれ、思わず想像力を掻き立てられる作品たちをご紹介します。一つひとつの作品から、あなただけの物語が紡ぎ出されることでしょう。

例えば、鳥を愛した画家として知られる脇田和（1908-2005）の《鳥の伝言》(No.36)。画面右上から左手へ羽ばたく一羽の鳥。そのくちばしには、小さな青いものが大切に咥えられています。それは、遠い誰かへ届けるための、秘密のメッセージが書かれた手紙でしょうか。あるいは、特別な想いを込めた、ささやかな贈り物かもしれません。一見すると白く見える鳥の羽根や、画面に舞う不定な形の中にも、実は繊細な青色が静かに息づいています。この随所に潜んだ青が、作品全体に不思議な一体感と、まるで物語の中に入り込んだかのような奥行きを与えているのです。みなさんには、この鳥がどのような伝言を運んでいるように見えるでしょうか。

脇田和が空を飛ぶ鳥をモチーフとして物語を紡ぎ出す一方で、堀晃（1952-2019）の《海の話》(No.37)は私たちを深海の物語へと誘い込みます。画面の中央には、悠久の時を経て積み重なったかのような岩の山が、まるで海底にそびえる聖なる場所のように鎮座しています。その頂には消え入りそうであるのにそこに存在する、月の残影のようなものが優しく輝き、さらにその上、遙か彼方には、完璧なまでに円い満月が浮かんでいます。そして夜空から降り注ぐ無数の星々が、希望の光のように煌めいています。画面の右端からは何かの生命が通った痕跡であるのか、あるいは太古の記憶が流れ出ているのか、石のようなものが水の中を切り裂くようにたゆんでいます。私たちを優しく、しかし確かな力で抱きしめるような深海の青。その青はただの色ではなく、すべての音を吸い込み、心を研ぎ澄ますような静寂を湛えているようで、宇宙の始まりのような底知れない深みや神秘性を思わせます。

色々な青の表現

本章では、抽象絵画や版画作品などにおける色々な青の表現を見てみましょう。吉原英雄（1931-2007）の《青い部屋》(No.49)は、その題名が示す通り、画面を支配する鮮烈な青が印象強い作品です。青は単なる背景色にとどまらず、作品全体のムードとメッセージを深く決定づけています。画面上部から下部にかけて広がる、均一でやや明度を抑えたコバルトブルーは、空間の広がりと同時にある種の静謐さ、あるいは緊張感のある雰囲気を感じ出しています。この青が目に見えない「部屋」の空間を具象化し、鑑賞者をその内部へと誘い込むかのようです。また、部屋に置かれた黒い椅子と、その上に座るように抽象的に表された赤い服の人とのコントラストが、画中の青の持つ意味合いをさらに強調し、孤独感を暗示しているようにも見えます。青は空間にあるものを包み込む広大な場であると同時に、内省的な精神空間をも表しているように感じられます。

西洋の青

地中海に魅せられた芸術家たちの青

地中海は古くから多様な文化が交差する場所であり、多くの芸術家を魅了してきました。この地で育まれた豊かな色彩、特に空と海の広大さを象徴する青は、数多くの芸術家の心を捉え、その作品に深い影響を与えてきたのです。

マルク・シャガール（1887-1985）にとって、地中海の青は特別な意味を持っていました。ロシアで生まれ、後にフランスで活躍したシャガールは、地中海の明るい陽光と、どこまでも広がる青い海に魅せられました。故郷の思い出や、最愛の妻ベラとの愛、少年時代に目にしたロバや花といったモチーフと結びつき、彼の描く青は、幻想的で詩情あふれる世界を彩ります。91歳の時に描かれた《青い花瓶》(No.58)では、深い青を背景に鮮やかな赤や白の花々が浮かび上がり、過ぎ去った時間の儚さと幸福が共鳴しているかのようです。シャガールの青は単なる色彩を超え、記憶や感情、そして夢が溶け合う高い精神性を表象するものと言えるでしょう。

一方、日本の画家である野口弥太郎（1899-1976）もまた、地中海の青に心を奪われた一人です。《タンジールにて》(No.54)は、73歳の時に訪れたモロッコでの制作をもとに生まれた作品で、強い光に照らされた家並みや人々の生活が描かれています。彼の青は光と影のコントラストを通して、その土地の空気感や生命力を鮮やかに描き出すための、重要な要素となっているのです。

アルベール・マルケ（1875-1947）もまた、北アフリカの風景を愛し描いた画家です。彼はフォーヴィスムの色彩感覚を持ちながらも、灰色を基調とした調和と均衡の取れた構図に基づく表現を追求しました。アルジェリアを訪れたマルケは、そこで目にした柔らかな光と、海や空の微妙な色彩の変化を繊細な筆致で捉えています。《停泊船、曇り空》(No.56)は画面全体を覆う穏やかな灰色がかった青が印象的です。それは単なる風景描写に留まらず、画家の内面的な静けさや、その場に流れる時間までも感じさせるようです。本作における青は、抑制された色調の中に、無限の広がりや深みを感じさせる瞑想的な色彩と言えるでしょう。



No.36 脇田和 《鳥の伝言》1986年



No.37 堀晃 《海の話》



No.49 吉原英雄 《青い部屋》1970年



No.56 アルベール・マルケ 《停泊船、曇り空》1922年

おわりに

本展では、みなさんとともにさまざまな美術作品に表現された青の魅力を探求してきました。それは単なる色彩の枠を超え、それぞれの作品の中で豊かな物語を紡ぎ出し、私たちに語りかけてきたのではないのでしょうか。時代や文化、そして表現のジャンルを軽やかに飛び越え、なぜこれほどまでに青は私たちの心を惹きつける普遍的な魅力を放つのでしょうか。この展覧会を通して、描かれていた青のイメージや、それに対する深い思いから、みなさんの心にささやかながらも新たな彩りが加わったとしたら幸いです。

美術館での旅はここで一旦幕を閉じますが、「ブルーの世界」に終わりはありません。一步外へ踏み出せば、新たな「青の発見」の始まりです。見慣れた空の青、遠くに霞む^{かす}山の青、そして何気ない日常の中にひっそりと隠れている小さな青の輝き。きっと、その一つひとつが、今日まで気づかなかった美しさや奥深さで、私たちを静かに迎え入れてくれるはずです。青がみなさんのこれからの日々を鮮やかに彩る光となりますように。

(学芸員 笠原綺華)

【註】

(1) 「福山支社座談会・日展入選者を囲んで」『山陽新聞』（昭和26年10月12日）

【主要参考文献】

目黒美術館編『ワークショップ・手と目の冒険広場 色の博物誌・青—永遠なる魅力』（目黒美術館、1992）

式年遷宮記念神宮美術館編『特別展 青の表現—歌会始御題にちなみ—』（式年遷宮記念神宮美術館、1999）

小林康夫『青の美術史』（平凡社、2003）

鈴木一生「新収蔵作品 マルク・シャガール〈青い花瓶〉について」（ふくやま美術館、2018）

青の思い出スケッチブック

このコーナーを使って「私だけの青」を一緒に見つけよう！

「ブルーの世界」展で特に印象に残った青の色や作品、技法などを自由にかいてみよう。

もしもあなたが青いものになれるとしたら、
何になりたい？その理由は？

美術館の外で見つけた青をスケッチしよう。
あなたはその青に何を感じたかな？